日本教育新聞
2021年10月25日掲載

日本教育新聞　2021年（令和3年）10月25日（月曜日）

生徒がフリーペーパー制作

千葉商科大学付属高校

千葉商科大学付属高校（浅川潤一校長、生徒952人）は本年度、地元の千葉県市川市にある「道の駅いちかわ」の出店企業と連携し、同駅の魅力や各店舗の商品を紹介するフリーペーパーを制作し、これから協働で商品開発に取り組むところだ。コロナ禍の影響で、当初の企画段階よりも取材の回数を減らすなど変更点があったものの、生徒たちはICT機器を活用し、工夫を凝らしながらフリーペーパーを制作する姿が見られた。

授業は商業科の「マーケティング」「ビジネス実務」の2科目で実施した。活動のメインは商品開発だが、まずは現在の商品のラインアップを把握し、魅力を発信していこうと、フリーペーパーの制作を決めた。授業を担当する田名慧資教諭は「商品開発の取り組みを充実させるには、現状を深く知ることが重要。フリーペーパー作りを通して、生徒の興味・関心を高めることができると考えた」と話す。

メモを取りながら、出店企業の担当者に取材する千葉商科大学付属高校の生徒たち

商品開発の取り組みを始めるに当たり田名教諭が中心となり、授業の担当教員たちが同駅の出店企業に狙いや目的、概要を説明。「新しい特産品を作る過程では、どうしても店舗の側に負担も生じる。企画のメリットを明確にして、生徒のためにもお店のためにもなる活動にしていきたい」などと思いを伝えた。

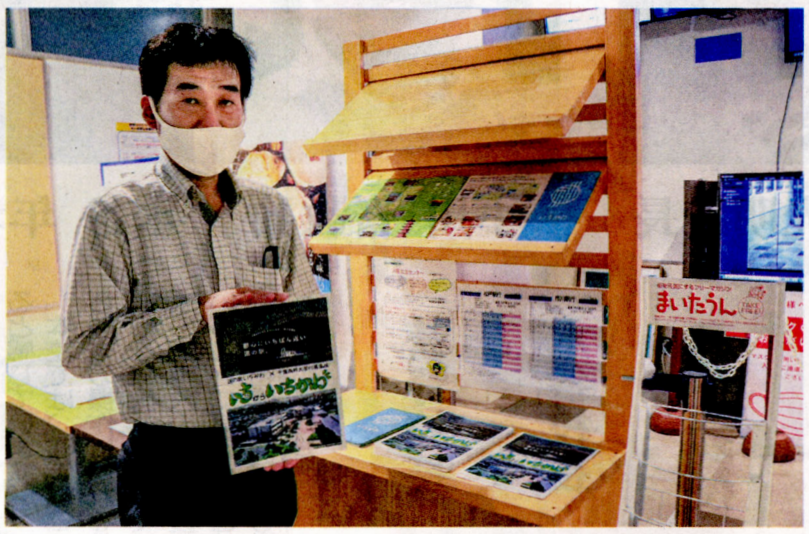
ビール会社など10社と連携・協力

学校との連携・協力が決まったのはパン屋やビール会社など10社。事前に同駅の担当者に生徒への講演を依頼し、各企業の理念や商品の概要をまとめたビデオレターを流してもらった。同駅の全体像について生徒の理解を促すとともにフリーペーパーで紹介する企業を選びやすくするためだ。商品の一部は提供してもらい、イメージが膨らむよう努めた。

フリーペーパー作りの準備段階では、マナーや取材方法などをまとめた資料を生徒に配布。会社の歴史や経営者の経歴、思いや情熱、苦労、感動体験が取材のポイントになるといった内容を示し、企業と商品の魅力を引き出せるように指導した。同じ企業を選んだ生徒同士でチームをつくり、取材依頼などに取り掛かった。

「道の駅いちかわ」出店企業の魅力伝える

取材では、企業理念、起業した理由、お薦めの商品などに関わる質問が多く出たという。スマホやタブレットを活用して取材メモを取る様子が見られた。


生徒が作成したフリーペーパー「いちからいちかわ」を手に得意げな様子の「道の駅いちかわ」の麻生岳人駅長

アプリを活用し端末上で協働作業

取材を終えた6月からフリーペーパー作りが始まった。教員が生徒同士の話し合いをリアルタイムで支援できる「MetaMoJi ClassRoom」というアプリを活用。タブレット端末上で、文字や図を入れながら、協働作業ができる。教員は生徒の状況を確認しながら指導に当たった。

進捗（しんちょく）状況については、学校から企業に連絡し、情報を共有。生徒は夏休み中も制作を続け、企業から学校や生徒に寄せられた要望なども伝えた。生徒はより良い紙面作りに向けて自主的に連絡を取り合うようになっていったという。

ビール会社を取材したグループは、事業の概要に加えて、ビールを醸造している工場や含まれている成分についての解説文を掲載。フリーペーパーに付けた見出しは、「お客様を飽きさせない～クラフトビールの楽しみは無限大～」というものだった。他のグループも、写真の配置やデザインなどのレイアウトについて議論を深め、各企業の良さを読者に分かりやすく届けられるように工夫していた。

コロナ禍を踏まえ企画内容の変更も

一連の活動は全て順調だったわけではなく、コロナ禍を踏まえて学校の判断で、当初の企画内容を変更せざるを得なかった部分もある。フリーペーパーを制作する過程で、企業への取材を6回程度行う計画を立てていたが、1回に減らし、取材時間を2、3時間に増やした。さまざまな制限があっても、生徒たちは「与えられた環境の中で何ができるのか」と考え、協力し合って紙面作りを進めていった。

完成したフリーペーパーの発行部数は3千部。同駅や連携企業、学校説明会に参加した中学校3年生や保護者に配布した。

同校は今後、フリーペーパーで紹介した企業と連携しながら商品開発を進める。田名教諭は「今後の活動で、どのような商品が開発されるかは分からないが、価値観やスキルなど目に見えない部分の成長を楽しみにしている」と語った。

千葉商科大付属高＝☎047・373・2111